

壁にぶち当たる。それを乗り越える。  
人はそれを繰り返して成長していくのだろう。  
乗り越えた壁の向こうに何が見えるのか。  
目の前の壁にどう挑むべきなのか。  
壁を乗り越え、何かを手に入れた  
その人が語る、ブレイクスルーの瞬間とは。

私の前には今、順調に壁があります

二胡奏者  
チェン・ミン

Chen Min



一度手にした地位や将来を、たやすく捨てられる人はいないだろう。けれど新しい自分に出会うためには、ときにその勇気を振り絞ることも必要だ。言葉や文化、そして自分自身の表現の壁を乗り越えた素敵な女性は、自然体で、けれど真剣にそれをやりとげ、今、人々の心を癒す音を奏でている。

Text: Akira Yokota Photograph: Yukio Yoshinari

プロ演奏家の地位を投げ出してまで  
学びたかったのは日本のよき文化

テレビのスポーツニュースやコマーシャルで流れる艶やかな、けれどどこか懐かしいゆらぎのある調べ。中国の伝統的な弦楽器、二胡が今、静かな人気を呼んでいる。テレビやラジオでのオンエアはもちろん、若い女性の中には、これを習いたいという人が増えているという。その人気の火付け役がチェン・ミンさん。本場中国から来日して13年という美人演奏家である。

チェン・ミンさんによれば、「二胡は中国では誰もが知っているけれど、わざわざ聴きに行くことはない楽器」という。日本で言えば、かつての三味線や琴のような存在ということになるのだろう。しかし、彼女はその伝統的な楽器に新しい可能性を与えている。石井竜也さんや渡辺美里さんといった日本のミュージシャンのコンサートにジョイントしたり、この春に発売されたニューアルバム「MOON - 一月亮心 -」では、「ラスト・エンペラー」や「昴」といったおなじみの曲をまったく新しいアレンジで聴かせ、心からの癒しを聴く者に与えてくれるのである。

そんな彼女が日本への留学を望んだ時には、周囲からの大変な反対に遭ったという。

「中国では、私のおばあちゃんぐらいの年代ではまだ日本人への複雑な感情が残っていて、私が小さい頃でもそんな話をよく聞かされました」

あの戦争は60年も前、と思うのは日本人だけ。歴史の過誤は被害者の心のうちには今なお深く傷を残していたのである。

しかし、日中間の情報の行き来が増えるにつれて、若い世代ではそれも変わりつつある。チェン・ミンさんの心を日本に向けたのは、ニュースで伝えられる経済や文化、そして中国語に吹き替えられた映画がきっかけだという。

「吉永小百合さんや山口百恵さんの映画を夢中で見ていました。高倉健さんや武田鉄矢さんの『幸福の黄色いハンカチ』も好きでしたね」という中で、日本の文化への好奇心がかきたてられたのだ。

「お箸や書道には親近感を持つ一方で、たとえば日本人はひとりて食事をしても『ごちそうさま』って言うでしょ？ そういう中国にはない習慣がとても不思議で、やがて美しいと感じるようになったんです。それから『日本髪の中身はどうなってるんだろう』とか『着物の帯の中は何が入っているの』とかね」と笑う。

父上が二胡の指導者、母上が日本で言えば宝塚のような越劇とい

う舞台の女優という芸術一家に育ったチェン・ミンさんは、幼いころから父上の手ほどきを受け、上海の芸術学校を卒業して、当時すでにプロの二胡奏者として活躍していた。にもかかわらず、言葉もわからず、将来へのなんのあてもない日本へ渡り、その文化を学びたいと言いつつ出たのである。反対されたのも当然だっただろう。

それでも「今思えば無謀でしたよね」と流暢な日本語でおどける日本行きを、彼女は決心からたった半年で実行に移した。「失敗してもいいから行ってみるよ」。91年、彼女はみずからの前に乗り越えるべき壁を置いたのである。

## 自然体で乗り越えた壁の先には 新しい出会いが待っていてくれた

来日当時、「ゆくゆくは音楽を、とは思っていました」とはいうが、チェン・ミンさんにはなんのツテもあてなかった。まずは日本語学校に入学して大学受験を目指したが、「日本語学校の先生は普通の日本人で、黒板に絵を描いたり、身振り手振りでなんとかコミュニケーションするのが精一杯」というありさま。おそらく当時は今以上に、日本の社会全体に外国からの留学生を迎える体制が整ってなかったに違いない。

それでも、明日から食べていく手段は見つけなければならない。そこで彼女はまたもや無謀にも、「募集」と漢字で書かれた張り紙を頼りに喫茶店に飛び込み、ウエイトレスのアルバイトを始める。

「でも、なにしろ言葉がわからないから、お客さんにお水を持っていくなり注文されたりすると、もう困っちゃって」

日本語がひとことも分からずに行く方も豪気だが、雇う方も凄い。けれどその待たなしの真剣勝負が、彼女の日本語をめきめき上達させた。

「人間、与えられるものにはありがたみを感じないんじゃないかしら。勉強だって、押しつけられても身が入らないけれど、本当にしたければたとえお休みにお金を払ってでも行く。そうして学ぶ喜びがわかったらもっと成長するはず。私の場合、最初はとにかく毎日ひとつでも言葉を覚えることに必死だったし、ひと言でも単語を覚えれば会話ができてくることがわかってくと、新しい言葉に出会うのが楽しくて仕方なかったんです」

ある種彼女は“天然”なのだろう。とにかく興味がある壁の向こうに飛び込んで、そこに必死で適応する中で、自分自身を成長させているのである。大仰な能書きを述べるでもなく、かといって醒めているのでもない。自然体で、しかし着実に前に進むのだ。

そのスタンスは音楽に対しても同じらしい。来日からの約2年間、彼女はほとんど二胡に触れることがなかったという。壁の薄い安アパートでは楽器の練習などできない。まして日本語学校とアルバイトで、ヘトヘトの毎日。やらねばならないことに追われて、時間的にも状況的にも、音楽に触れる余裕などなかった。



癒しの音色を奏でるチェン・ミンさん  
2004年は、6月からスタートしたツアーで全国51カ所をめぐり、11月10日東京・オーチャードホールがツアーファイナルとなる。

「あのころは、気がついたら弾いていなかった、という感じでした。でも、本当に弾きたかったら弾いていたと思うんです。たぶん自分の気持ちも中途半端だったのかもしれませんが。日本では、二胡を弾かない生き方を選ぶこともできたんですから」

しかし、2年後に無事に女子大に入学し、念願の日本文化の勉強を始めてみると、ふたたび二胡に触れる機会が訪れる。

「だんだん友達ができて、中国でしていたことを話したりすると『聴かせてよ』とか『教えて』という人も出てきました。やがて日本で音楽活動をしていた中国の人たちとも交流が始まり、留学生の集いなどで演奏したり、といった機会も増えていったんです」

そんななか、94年にチェン・ミンさんは世界的なファッションデザイナーである三宅一生さんのパリ・コレクションの舞台上、邦楽のバンドと生で演奏する話を受ける。未知なる音楽とのコラボレーションの始まりである。

「昔からある二胡の名曲は、マイナーな旋律が多いせいか、劇中でもどちらかというと哀愁が漂うシーンに使われて、悲しいイメージを持たれることが多かったんです。でもショーでは、伝統的な旋律に合わせても、こんなに華やかに歩けるんだ、という驚きもありましたし、中国以外の国での演奏では、聴衆の反応も全然違うんだ、という発見もありました。正直なところ、中国にいたころは音楽に触れる喜びや、表現する楽しさみたいなことはあまり意識しないで演奏していましたが、だんだん、音楽って楽しいな、と改めて思うようになったんです」

おそらく、保守的な伝統楽器としてそれを教えてきた父上には、想像もできないコラボレーションだったかもしれない。誇り高き民族楽器の演奏としては邪道、と思う人中にはいるだろう。けれどチェン・ミンさんはやはり自然体で、長いつきあいの二胡と新しい文化との出会いを楽しみ、やがてそれは認められてメジャーレーベルでのデビューをも呼び込むことになる。

## ひとつひとつ真剣に壁に向かえば 人生も楽器もきっと応えてくれる

今、チェン・ミンさんがステージで奏で、アルバムに収めている楽曲は、紛れもなく、彼女にしか出せない、彼女自身の調べだ。

「でも、自分自身の音を作ろう、と思うようになったのは、やっぱり日本に来てから」と彼女は振り返る。さまざまな文化や楽器との交流の中で、自分の生き方を表現する音楽の楽しみをみつけたのだ。それを実現させたのは、あえて自分の前に壁を置き、乗り越えてきた彼女の前向きさにほかならない。

「今、順調に私の前に壁があります」と、チェン・ミンさんはとても嬉しそうに笑った。

「自分にいいプレッシャーをかけるためには、少し高めの目標が必要だと思うんです。あんまりいろんなことが順調で、うまく行き過ぎると不安になって、新しいことを始めたくなる。それが壁なんです」

今までにない、ありえない楽器とのコラボレーションを試みたり、逆に思い切ったシンプルな編成でステージに臨んでみたり。

「このあいだは、パーカッションと2人だけのライブもやりました。二胡のゆらぎとパーカッションの間、ふたつの空気感がうまく溶け合っていて、互いの気のふれあいを感じられて新鮮で楽しかった」

二胡という楽器はシンプルだけに、奏者の心の動きが如実に出るという。

「楽器とのコミュニケーションが必要なんです。気持ちや愛情、想いが入ると、出る音も変わる。最近では、この楽器との関係が、自分の人生も教えてくれるのかもしれないな、と思っています」

PROFILE

チェン・ミン

中国・蘇州生まれ。上海戯曲学校で二胡を専攻、上海越劇院オーケストラでメインの二胡奏者として活躍したのちに来日。共立女子大学で日本文化を専攻。その一方でライブ活動、CMでの演奏などを経て01年にアルバムデビュー。NHK「サタデースポーツ」「サンデースポーツ」、日本テレビ系「おしゃれ関係」テーマ曲の演奏など、日本における二胡ブームの火付け役として活躍中。最新アルバムは本年2004年5月発売の「MOON-月亮心-」（東芝EMI）。

チェン・ミンさん公式ホームページ

<http://www.chenmin.net/>

〈チェンミン 二胡LIVE2004 MOON 月亮心〉

11月10日（水）東京・オーチャードホール

開場 18:00 / 開演 19:00

問：フリップサイド 03-3470-9999



4th Album「MOON-月亮心-」



「i love」ツアーの模様を収録したLIVE DVD

一曲でも一音でも心で奏でなければいけない。だからといって感情の昂りのままに演奏すると、その心が壊れてしまうこともあるという。

「ときには楽な気持ちで接したほうが、いい音が出ることもあるんです」

ここでもやはり自然体。

「ひとつひとつ、すべてのことに真剣であれば、必ずそれは通じると思うんです。感謝の心を忘れずに、恥ずかしがらず、こうなりたい、という目標に向かって必要なことをしていけば……」

まるで人生のようだ。そう、人生も楽器も、真剣であれば必ず応えてくれる、とチェン・ミンさんは言い切った。その通り、と思う。

「私、18歳のころからなんの根拠もなかったけど、『私の人生の花開くときは28歳』って断言していたんです。『今の自分は本当の自分じゃない』と思ってたんですね。でも、ちゃんと言った通りに花開いたみたい」とまた笑顔。

ちなみに「次に花開くのは38歳」。何で開くのかはまだナイショ。でも、きっと素晴らしい花を咲かせてくれることだけは間違いなさそうだ。